

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙二 3章6～13節

6兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい。7あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。8また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けたのです。9援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。10実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。11ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。12そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。13そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書 20章1～16節

1「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。8夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11それで、受け取ると、主人に不平を言った。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたち

と、この連中とを同じ扱いにすることは。』¹³主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。¹⁴自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。¹⁵自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』¹⁶このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。』

《神のぶどう園》【こども説教のために】

「緊急事態宣言」が解除されることになりそうです。長く控えていた外出や旅行の計画をされている方もあるかもしれません。秋の季節ですから、行楽地は賑わうでしょう。秋の実りを味わう小旅行などいかがでしょうか。もっとも、団体旅行はまだ憚られるかもしれません。

教会の皆さんに一度は経験していただきたい秋の行楽があります。「ぶどう狩り」です。わたしの母教会では、9月の連休に毎年「ぶどう狩り」の遠足の企画がしばらく続いてありました。石神井教会でも数年前、こどもの教会で、教会員の方の小農園で「ぶどう狩り」をさせていただいたことがあります。日本のぶどう園は、主イエスが目にしていたぶどう園とは違った風景かもしれません。それでも、主イエスが《ぶどう園》を題材にしてお話しくださったたとえや「ぶどうの木のとえ」は、実物を見たことがあれば印象が大きく変わります。たとえば、ぶどうの実をもぎ取るのが案外大変なことがわかれば、今日の福音書で主イエスがお話のたとえで、どうして次々に収穫のための働き人を連れて来ないといけないのかも、わかるのです。

主イエスは、もちろん、わたしたちがぶどう園を経営する農家になることを教えられたのではありません。《ぶどう園》は、「聖書」の中ではいつも、神がお造りくださって人が生きるようにされた世界のことです。旧約では「イスラエルの民」のことを特に指すこともあります。また、「天の国（神の国）」のことと言ってもよいでしょうし、「教会」のこととも言えるでしょう。

教会の礼拝堂に装飾模様を施す場合、大抵は《ぶどう》模様を用います。主イエスの教えに従って、教会が《神のぶどう園》であることを示しているのです。主イエスは、「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」（ヨハネ 15:1）とおっしゃられたこともありました。

《神のぶどう園》に招かれて来られた皆さんに、農夫である神は、ぶどうの実りをお与えくださるのです。それは、どんな味のぶどうの実でしょうか。教会によって味が違うかもしれません。けれども、どの教会も《神のぶどう園》です。このぶどう園の実りを味わうことができます。そして、神は、このぶどう園で働くことも、わたしたちに教えてくださっているのです。

「あなたもぶどう園に！」

皆さんは、《神のぶどう園》に招かれて来られました。たとえこの会堂にまで足を運ぶことができなくても、皆さんは、それぞれの場所で《神のぶどう園》に招かれて来られているので、今、わたしたちは一つの交わりを与えられ、一つの礼拝にあずかるようにされています。

わたしたちは、この《神のぶどう園》に一人でも多くの方をお迎えしたいと願っています。まだ《神のぶどう園》を知らない人にも知っていただき、この《ぶどう園》で収穫される実りを味わっていただきたいのです。

信者でない方を教会にお招きしようというとき、「伝道」と言うところか「上から目線」になって、押しつけがましくなってしまうところがあります。教会のことを知らない人に「伝道集会がありますからおいでください」と案内しても、大抵は構えられてしまって、なかなかおいでいただけることになりません。確かに、使徒パウロでさえ、アテネの知識人たちを前にして「あなたがたが知らずに拝んでいるもの…をわたしはお知らせします」(使徒17:23)と打って教えたときには、結局最後には皆にそっぽを向かれてしまったのです。よほど高名な人などを講師に連れて来れば別ですが、わたしたちが人に何か教えてやらんかなの態度でいたのでは、喜んで受けとめてもらえることはないでしょう。

《ぶどう園》にお誘いするのであれば、どうでしょうか。秋の行楽としてぶどう狩りにお誘いするように、わたしたちがいつもその実りを楽しんでいる《神のぶどう園》に、実りを楽しんでもらうためにお招きするのです。

教会が《神のぶどう園》であるのならば、わたしたちは、ここで行う礼拝や集会をはじめ、お互いの関係をどのようにしたらよいか、ふさわしい形を考える必要があります。《ぶどう園》なのですから、ここが学校の教室と同じようでは成り立たないでしょう。もちろん、果実だけを売る《果物屋》とも違います。おいでいただいた方にぶどうの実りを味わっていただくためには、日ごろからぶどうの木の世話をしていなければなりません。土を管理し、実らせたいぶどうの苗木を植え、育て、季節ごとに枝を剪定するといった作業は、人の目に触れなくてもコツコツと怠ることなく積み重ねる必要があります。その上でようやく結んだ実りは、ぶどう狩り気分で来られた方が一瞬で食べ尽くしてしまうかもしれませんが、すべてはそのためなのです。

わたしたちも、初めは、《神のぶどう園》で日々積み重ねられている地道な働きなど知らずに、ただぶどう狩り気分ですり実りを味わったのでした。ただ、《ぶどう園》の主人は、あるときから少しずつ、その《ぶどう園》の日々の地道な働きを手伝うように、わたしたちに呼びかけてくださっていたようです。初めは夕方5時ごろから、そして少しずつ早い時間から。

同じ扱い？

愛する皆さん、《神のぶどう園》で一緒に働きましょう。もちろん、ここで得られる実りを一番に味わう特権付きで、です。

《神のぶどう園》で神が実らせてくださる実りを一番良いものにするために、皆さんは、働き人として招かれてきたのです。ここでは、牧師や役員が皆さんに働きを依頼するわけではありません。「牧師に言われたから仕事をやる」などというけち臭い考えは捨てましょう。皆さんを《神のぶどう園》の働きに招いてくださっているのは、《ぶどう園》の主人であり農夫である神、天の父なのです。

誤解しないでいただきたいのは、《ぶどう狩り》という甘い宣伝文句に誘われて《ぶどう園》に来てみたら、いつのまにか《ぶどう園》でただ働きさせられることになった、というような話ではないということです。たとえの中で《ぶどう園》の主人は、《ぶどう園》から出て行って人を見つけ、《ぶどう園》に招きました。そのとき、主人は最初から、その一人ひとりを働き人として誘い、報酬の約束をしているのです。わたしたちが教会という《神のぶどう園》に導かれて来たとき、神は最初からわたしたちを、ご自身の《ぶどう園》の働き人として誘い、呼び集めてくださったのです。

それは、神の働きが不足しているからではないでしょう。神ご自身の《ぶどう園》の農夫としての働きを、わたしたちにも分かち合わせようとしてくださったからではないでしょうか。わたしたちは、共に働き、共にその成果を分かち合うときにこそ、お互いのことを分かりあえるのです。わたしたちにご自身の働きを分かち合わせようとしてくださっている神は、何よりも、わたしたちに、天の父としてのご自身の御心を分かち合わせようとしてくださっているのに違いないのです。

そうであれば、わたしたちは、この《神のぶどう園》での働きに加えていただく中で、お互いの働きぶりを見て、良いとか悪いとか、何か言うことができるでしょうか。神が、その貴い御業のお働きにわたしたちをお招きくださっているのです。神の御心を知り、神の御業の事業に共に参与する喜びを知るようにされる、この一点において、神は、わたしたちすべての者を、同じように扱ってくださっているのです。

たとえわたしたちが朝 5 時からこの働きに加わり、労苦してきた者だとしても、《神のぶどう園》の主人は、夜明け前から、いいえずっと以前から、この《ぶどう園》の計画を立て、ゼロから創造し、わたしたちが招かれる場を整えてくださったのです。そこに、わたしたちは、夕方 5 時に招かれてくる者をも迎えるのです。その人たちも、明日には、早朝 5 時から、わたしたちと共に、《神のぶどう園》の収穫の働きにあずかることになるでしょう。